本がきだが
インクが直に
水でとけてしまう
から長く保存が
出来ない

千九百八十三年一月半ばより降り出しました雨は休む間もなく降り続き
三月下旬になりましてもまだ降り続き居り百年来の大雨の年といはれ
サンタクララ平原の東南の山ふところにあります　アンダーソンダムは
満水となりさながらナイヤガラの瀧の如くにカヨテクリキにあふれ出し
カヨテクリキの下の方桑港湾に近い地方は四ヶ処も堤防が切れアルビソ方面は
洪水となりアルビソの町は八尺も水中に入り居り總立ち退きの災難にめぐり
あつて居ります　今自分等の住まつて居ります処はミルピタスの町の
山の手よりの高台にありますので其の難はまぬがれました
ミルピタスのババーレインの前に自分等の畑でありました最初の地主でありました
パイオニヤババー家の二世のローレンスさんが昔私に話された事でしたが
自分の子供の時であつたが大雨続きの年馬も牛もパスチャーから皆
バーンの中にかくまつた事があつたがそれは馬も牛も足がぬかりこ刈
動けなくなつたためだつたとの事でありましたが一度今年の雨は
その時と同じように降り続いて居るのでわないかと思われます
雨中のつれづれに昔の色々の事を思い出して居る時此のアメリカに来たにより
深き因縁にむすばれて居りました故加倉井量義氏の事ども
自分の記憶にある丈にと思い此の度ここに書き記しておきます
加倉井氏は茨城県水戸市の名家の出身であられました氏の兄上は
水戸の第一銀行の頭取りをながらく務められた方でありますそうです
又曾祖父は？徳川幕府末期近くの頃の漢学者でありまして翁の私塾より
大多くの傑出した人達が輩出明治維新の大業がなしとげられた
遠因ともなつた事と信じられます
明治天皇はそれをおぼしめされ天皇より正三位の勲位に
あづかられて居られるとうであります
加倉井量義氏は米国に留学されアメリカがすきになられて其のまま
アメリカにとどまつてしまわれた方でありました

越賀師と父がスタンフォード大学校での仕事を得られ学校の地下室で
二人で自炊を致しながら働いて居られた時加倉井氏は留学中であられ
よく地下室をたずねられお心安くなったのだそうであります
千九百十四年に父が越賀師の両援助を得られ千九百〇七年よりの渡米
以来の希望でありました セロリ作りをアルビソで勧められました。 父は
サンタクララバレイのセロリ作りのパイオニヤであります 其の後で
加倉井氏は越賀師と父をしたい一時アルビソに引き移って来られアルビソの
元老岩崎様のアップルランチで仕事をして居られました
アルビソはセロリを作るにはよいところでありましたそうですが毎年のように大水に
なやまされるのでもっと水の出ないでイの近くにより畑がないものかとさがしあるき
ミルピタスよりのカヨテクリキの西側ぞいのシルベラさんの若い梨畑の中にセロリの
間作を初めて居られた年に私がアメリカにやって参りました
千九百十九年かぞえ年十七歳の時でありました セロリの手つれも一通りすんだ
合間に加倉井様のお世話で私も岩崎様のアップルとりの仕事をさせて
もらいました

其の後加倉井さんはネブラスカ州で加納子爵家出であり牧師であり
かたわら農場の経営をして居られました加納家の農場近くで黄河者を
得られ引き移られて牧畜業を初められましたが千九百廿年代の大不況の
時加州に切り上げて来られました それから間もなく子供の時からのいいなづけて
あられたいとこの加倉井ふみ子様とのお結婚のために一時帰国をされ其に
再渡米をされ父の世話で野菜の育性を初められましたが第二世界大戦勃発
所家をまもってコロラド州のデンバー市近くに立退いて居られました
終戦後は南加ガーデナー市に居をかまえられましてから一家お揃いで
ミルピタスをおたずねちさつました
亡父の所葬式の時には遠方よりわざわざおいで下されまして其の後で又所一家
お揃いで亡父のお墓まいりにおいで下さいました
ありがたい事と何時も思って居ります

おしくも十六歳で郡他界になりました　ガーデナ教会での
お葬式には私も参列させていただきました
加倉井ふみる様は　私が今此の書をしたためて居る二十三年四月初旬
郡病気中たら郡長男のジョーさん郡夫婦に見守もられたら
お平安な日送りをあそばし居られますようでありますので私の次男宏の
都合のつき次第是非共一度おうかがいせねばと感じ気にかゝって居ります
私が加倉井様からお聞きした事を此処に書きとめておきます
加倉井氏の家系は源氏の真流でありますそうです
郡先祖は源義家殿の弟新羅三郎源義光殿の　三男
波紀井六郎さねなが殿であられるそうであります
其の当時奥州に勢力をひろげて居りました（名前を失念しました阿部一族では？）
なかったかと思い此処ではかりに阿部貞衡宗衡一族として話しを進めます
奥州は衡方の事でもあり京都の朝廷よりの教詔にも再三したがわずに
居りましたため　天皇の教命により源義家殿が将軍となり兵をひきつれての
遠征となり阿部一族が天皇の命令にしたがふ事を約束させて京都に
凱旋された　元を前九年の役といふたのではないかと思います？
ところが其の後で阿部一族が再び謀叛を起しました　再び教命により
源義家殿が二度目の遠征となったこれを後三年の役といふたのではと思います
後三年の役の時には前もって阿部一族が朝廷の回りの反対党の権力者と手を
組み莫大の準備をしての謀叛でありましたために義家殿は非常な苦戦と
なり京都の朝廷に再三援軍の送り出しを要請されましたが途中で
皇室の回りの反対党の権力者等によりにぎりつぶしにされて居りために
天皇の耳にとどかずに居りました　弟の新羅三郎源義光殿は義家殿の
苦戦の程を思いやってもたってもいられぬ程の心配で教詔をまちきれずに一族
郎党を引きつれて義家殿の援軍としてはるばる奥州にはせ参じられました
により戦勝となり阿部一族が二度と立ち上る事の出来ないようにと徹底した
仕置きをされて義家殿は京都に凱旋をなされたのだそうであります

しかしこれら弟の義光殿は教訓をまたずに（族郎黨を引きつれて東下りを
された事に對し臣對黨がどのように動くかといふ事を思いはかられ、族で相談の上
関東から甲州。信州。（母に散り散りになり自立たぬ抑止着する事になったのだそうです
其の時加倉井氏の祖先にあたる源義光殿の三男波紀井六郎さねなが殿は
甲州（山梨県）の山の仲の波紀井の庄におちつかれ波紀井の性を名のられたのだそうであります
波紀井六郎殿は日蓮聖人に帰依され自分の持ち山でありました
身延山を聖人に寄進された方であるそうであります
当時日蓮聖人は大変な迫害を受けつゝあられましたので波紀井六郎殿は護身用
にと源家の寶刀を献上されました聖人はそれを佩き栖頭に数珠をかけられて
山の登り下りをされて居られたので其の寶刀を数珠丸とよばれて居りましたそうです
日蓮聖人のお弟子さんに日ショーさまといふ方がありましたこのお方は盲目であられた
そうです日ショーさまもえらく迫害を受けつゝあられたので波紀井六郎殿はこの
日ショーさまをお守りされるためにひそかに永戸在に移られ名前を（かくれて居る）
加倉井とかえられたのだそうであります
時代が移りかはりそれから四世期程後徳川幕府の世となり黄門さま（徳川光国公）が
水戸の領主となられた時よく加倉井家の其の当時の祖先さまの所へ其巻遊びに
来られたそうでありました　ある時黄門さまが加倉井家の大きな長屋門の
外にありました楠の木の大木を見られ自分がもらいたいとの事ゴなにてなさる
のですかとたずねられました時これで日本一の大太鼓を作りたいとの事でゴんで
差上られたのだそうであります
黄門さまが楠の大木をもらわれた即礼にと扇子に自筆で礼を書かれた
ものが生家に保存してあるといふて居られました
加倉井様が日本に居られた子供の時代には其の大太鼓は水戸の公園内に大切に
してかざってありましたそうです
日蓮聖人の御弟子さまの日ショーさまの書かれました
南無妙法蓮華經といふかけものもあるがめんらでありたのでサイなるために
なって居るといふて居られました

波紀井六郎殿が日蓮聖人に獻上されました源氏の寶刀数珠丸が
明治の世になりましてから何時の間にか身延山から姿を消してしまい
日本全国に渡りさがされて居りましたが見つからずに居りましたそうです
加倉井様がネブラスカ州から切り上げて来られ日本に一時帰られるマ定で
あられた其の前に一時ミルピタスの私共がエブルさんの畑を借り其の伸に
建てたキャンプで私共と共に過して居られました時日米新聞紙上に
数珠丸の寶刀を日本の刀剣の博士がこちらでそれを見出されて
日本にもち帰られたという事が出て居りました　それを見られて
加倉井様が今迄私が書きつられました加倉井家の昔の事を残らず
私に話して聞かせて下されましたので私は自分の事のようにしっかりと
おぼえておきましたこと
加倉井家の家紋と私共武田家の家紋は同じく四ツ菱であります
日蓮聖人と親鸞聖人とはほぼ同じ年代の方であると思います
箱山に居城を築いて居った高梨氏は源頼朝と同族で近い血縁であった事
私共の先祖が高梨氏とは何かの縁故により兄弟二人で一族を引きつれて
箱山の北側の地続きである竹原部落を開拓して定住あまりはでばらずに
質素剛健の暮し方をして居ったように思われるには何か理由があった
のではないかと思われる事
浄土真宗佛教の開祖親鸞聖人の御母上は源頼朝のいとこであられた事は
歴史上に記されてあり藤原家でもあまり上位でない家の人と結婚された
間に聖人はお生れになり早くから佛門に入られた方でありました
当時の皇室の廻りの權力者たちにより宗門の事で師の法然聖人と併に
流罪となられ親鸞聖人は越後の高田に流罪とさせられました
聖人の一番目のお弟子さんは高田に流罪となられて居られた時に
私弟子となられた方であると聞いて居ります
聖人は其の後罪を許されられて晩年は京都にお帰りになられ
九十歳でお亡くなりになって居ります。

聖人のおなくなりになられた時一番目か、お弟子さんも京都に居られそして
お聖人の印留をわけてもらわれて越後の高田に帰りになる途中
私共の先祖竹原の大本家で一冬を過ごされてから高田に帰られて
西寺を建てたから檀下にといふ事でそこの檀下になつたのだと父から
聞いて居りますが此のお寺さまが浄土真宗高田派の本山浄光寺の開基
さまであるとの事であります 此のお寺さんが前からの知りあいでなくて突然と
竹原の大本家をおたずねになるわけはなく私共も源氏の流れであり前々から
親鸞聖人とも何かの縁で知りあいであつたのではと自考えられます？
何と何から何迄源氏に深い縁が重なつて居るではありませんか？
私共の先祖が高梁氏の居城である猪山に続いて居る竹原に定住した時代と
波紀井六郎殿が波紀井の庄におちつかれた年代と同時代といふ事になり
人にはあまり知られぬよう名前もかえて居られたといふ事を思いこのアメリカに於て
はからずも加倉井孫と深いおまじわりを得た事を思い新羅三郎源義光殿が
教訓を得ずにやむなく東下りをされて義家殿の援助に行かれ戦には勝たが
京都に帰れずに一族が散り散りに方ぼうに別れて土着したといふ事を考え
私共先祖も源義光殿との目に見えない絲のつながりがあつたのではないかと
あらぬ想像も頭の中に浮び出て参りますが加倉井孫もそらではないかと
いふて居られました 大本家の何代目かの時盛夏の虫ぼしにと倉から出して置た
博来の刀と系図ともども何者にかもちさられてしまつたと聞いて居り其の後大本家
では大インフレの時昨男小屋から失火主家も納家も倉も全焼全部の記録を
焼失してしまつたときいて居ります 又高田の浄光寺も大正年間の高田の寺町の
大火の時類焼の災にあい全焼其処の記録も焼失してしまつたと思わねばなりません
年をとりひまをもて遊ぶと色々と夢の様な思いに一人でひたる事が多くなり
思つた事聞いた事等書きつづりました所参考迄にと
千九百八十三年三月一日満八十一歳の誕生日を記念して
故武田富壽 次男 武田昌二 謹んで 大きを記す
加州サンノゼ市の寓居に於て